竜の世界にとりっぷ！９

御紋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
竜の世界にとりっぷ！９

【Ｎコード】
Ｎ０２８６Ｖ

【作者名】
御紋

【あらすじ】
この世界で答を探して。――迷いながら、愛しながら、誰のものでもない私の未来に答をしめすの。…恋愛の言葉がとても違和感ですが、これが限度です。竜とりシリーズ第９弾。予想外の文字数の多さと視点や場面変換の多さから、連載形式とさせていただくことにしました。本当にもうしわけない。【秋までに完結できるよう頑張ります。】

【ひと――愛し、】　（前書き）

こちらは、「動物の世界にとりっぷ！」作品たちと同じ世界観のもとで、書かれています。詳しくは、まとめサイトさま（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ２２．ａｔｗｉｋｉ．ｊｐ／ａｎｉｍａｌｔｒｉｐ／ｐａｇｅｓ／１．ｈｔｍｌ）へどうぞ。

＊蛇の描写について嫌悪を抱かれる方は見ないほうがよいかもしれません。

＊また新しい竜族限定設定が生じています。ご了承ください。

＊今回に限って連載扱いになっています。それでもよろしければご賞味ください。

以上に了解された方から、スクロールどうぞ！

【ひと――愛し、】

拝啓　我が愛する師よ

健やかにお過ごしでございましょうか。
我が身に起きた出来事を振り返るにつれて、なんと遠い場所へ落ちたものかと切に思います。
故郷を離れて、もはや二年も近づこうというこの日。
私は己の中の答を選びました。

もはや迷わぬと断言することが出来るのなら、いかにこの世は優しいものであったことでしょうか。
師に言われたように私は愚かにして惑するを好む性質であるようですから、――きっとこれから先も迷い、疲れ、溺するのでしょう。
けれど、それも私であるのだと知った今、私は今の己の答えを選択します。
己を慰撫するためだけに書き連ねてきた、この書とも封ともわからぬ行き先知れずの手紙を封印します。
それが今の私が選んだ答です。
いつかそれを愚かと思うのか善しと思うのかはわかりませんが、いまはただこの選択が未来の私にとっての最良となる選択であることを望むばかりです。

叶うのであれば遠い未来。

貴方と私の答が巡り、再び出会う縁があることを祈るばかりです。

最後に。

伝えられなかった一言をもって、結びとさせてください。

――――――父母を失くした5歳からの２５年の年月、愛して下さりありがとうございました。

できることなら、貴方の前でそう伝えたかった。

私から貴方への最後の言葉です。

敬具

帰れぬ故郷に生きる貴方へ

岩倉　佳永

◇

祖母が亡くなったのは春の半ばの頃だった。
祖父は町内会の旅行に出ていて、家には私と祖母しかいなかった。
「もう春ねえ」
「そうですね、おばあさま」
もう、春ですよ。
庭の桜の幹が赤みを帯びてきていて、春の開花を待つようなそんな季節だと実感させてくれる季節。
陽に当たる場所は暖かくても、陰の場所はまだ寒い。
気候の不安定さが祖母の身体の調子を崩していた。
「風邪ぎみなのかしらねえ」
祖父母で出かける予定だったが、大事をとって祖母は旅行をとりやめた。祖父もそれをうけて止めようかとしたようだったが、笑顔の祖母はお土産話を期待してますよとそう言って、祖父の旅立ちを見届けた。
近医のかかりつけの医者に処方してもらった風邪薬を呑んで眠りに着いた祖母は、もう目覚めることはなかった。
旅行先から返ってきた祖父は、ただ茫然とその知らせを聞いていた。
『宗吾さん』
いつでもそんなふうに祖父を呼ぶ彼女は、祖父の伴侶だったからだ。
彼女だなんだとかいいながら、結局のところあれはただの親衛隊だ。――たとえば、夫を失くして困っていた無職の女性だとか、家出してきた少女だとか、そんな女性たちを「彼女」だと呼んで保護していただけの話。
そんな彼女たちも、気分の上では父親や祖父を思うような程度でお世話をしていたにすぎない。
祖父が一番愛している女性が誰かということもわからないような女性は、一人も居はしなかった。

「…おばあさま」
喪服を着て遺族の列に並んで、ふと思った。
祖父はいつまで生きていてくれるのだろうかと。
思ってから、怖ろしくなった。
祖母の形身を整頓しながら、家族がひとりだけになったことを理解した。
いつまで生きてくれるのだろう。
いつまで見守ってくれるのだろう。
いつまで健康で居てくれるのだろう。
憎まれ口を叩きながら、元気に反論してきてくれる姿に安堵していた。
最後まで、祖父を看取る。
それは既に、私の中の決定事項だった。
「…歪んだ愛よね」
「……そうか？」
呆れた表情で私のことをそう表現した友人もいたけれど。
でも、それが私の家族愛のかたちであったのだから、仕方ないじゃないか。
武道館での修身を過ごしながら、私の日々はそうやって廻っていた。
あの日、知らぬ間に落ちた世界の穴を通るまでは。

◆◇

「今日はお仕事はお休みにしましょうか」
「…え？」
バランさま？
私の現在の上司である竜族の長、バランがそう言ったのは書類仕事用の墨も用意していないような、そんな仕事前の時刻でした。
「今日の佳永くんのお仕事はお休みです」
これは大老であるチェイサどのやファンリーどの、それから我が妻ミランダも承認したお休みです。
「お休み？」
「佳永くんの普段のお仕事のおかげさまで一日やそこらの仕事休みがあっても問題ない程度には仕事は順調にはけていますから」
ですから、今日は僕も貴女もお休みです。
微笑んだバランさまが何を言っているのか私にはよく分かりませんでした。
「――――　貴女が今日すべきことはたった一つですよ。佳永くん」
ぱたりと長さまが裏返したのは、届いた長への文を仕分ける籠でした。
いつもの私のお仕事は、その伏せられた籠に届けられた文を仕分けて、長に其の返事を書かせることでした。
なのに。
「もう、お仕事はおしまいです。――――　貴女の逃げ場所はもうありませんよ、『佳永』…さん」
貴女の答えを探してください。
生きるための役割も、糊口を満たすための報酬も、――――竜族に

落ちし人である貴女には、最初から与えられることは決まっていたのですから。

――――　あとは、貴女が選ぶだけです。

貴女が寄り添う世界を選ぶだけです。

「バラン、さま」

零れた言葉は、――――　意味をなさない。

「佳永くん。　――――――――　貴女は、この世界がお嫌いですか？」

世界を愛する竜族の長は穏やかに笑みながら、落ちてきた人――――『岩倉佳永』　に問うた。

【ふた――伝え、】

◇◆◇

体腔の奥にある肺を満たし、行き来する呼吸。
持ち上げた前の肢を内より外へ、外より内へと回らせて。
地を踏みしめた後ろの肢は、身に潜む力を支え保持し増強する。
閉じた目の代わりに、泡立つ膚が世界を感知する。――耳も、鼻も、口唇さえもが、世界の気配を捉えた。
ゆるりと動かしたその肢体は、地に這う龍の気配に相似していた。
「……独特だよね。佳永姉(ねえ)の動きは」
ぽつんと呟いたのは、バランさまの息子であるトラオム・バランさま。――16歳。
「むにゅ。……うごいてりゅかげ、…なの」
その膝の上でご機嫌に言葉を紡いだのは、同じくバランさまの息子であるガープ・バランさま。――3歳。
生まれた時から人の姿へと転化できる竜族ではあるが、それでも本態はあくまでも人形にはなく竜形にある。第二の姿形である人形ではあるが、竜族の幼生期において好まれるのは当然のように本態である竜形だ。
まだまだ幼いガープさまのお姿は、白色の竜体に赤色の混じった背びれを負った、それはそれは愛らしいものである。
ブラコンと呼んでも語弊が生じない程度には兄弟愛に満ちたトラオムさまの表情は、実にメロメロとかでれでれとかそんな言葉で表わすのに適したものに違いなかった。

かげ。――――世界を模倣する影の、動き。

ガープさまの言葉で、ふと感じるものがあった。

「――――そうですね。武とは、――――――　世界に歩み寄るための一つの道であったのかもしれません」

おそらくは、世界に添うこと。――――――――きっと、それが祖父に学んだ武の本質の一つめだった。

まだ朝日が昇りきらぬ時間、持てあました突然の休みを修業にあてようと庭に出て古武術の一連の型を行っていた私を見つけたのは、散歩に出ていたトラオムさまとガープさまでした。

ガープさまはともかく、トラオムさまはもう１６歳。――丁度成長期にさしかかり、竜形の不便さを実感し出すお年頃です。

「見ててもいい？　佳永姉」

「む。ぼくもみりゅ…よ？」

まだまだ人形での動き方に慣れていないトラオムさまが、古武術という人体の動かし方を極めたものを教えてほしいと言われた頃から、なぜかトラオムさまは私のことを「佳永姉」と呼んでくださるようになりました。（正直、可愛いなあと思いましたが。兄弟姉妹が羨ましいと思ったことは確かにありましたからね）

「かまいませんよ。どうぞ」
既に庭の片隅にあるベンチに腰掛けたトラオムさまへ答えました。
中庭を囲む木々の発する空気はとても気持ちがよいものでした、
「……よければ、トラオムさまにも手伝ってもらってもよろしいですか？」
「僕も？　…うん、やるよ！」
手伝う！
少しだけ、膝に座っていたガープくんへ眼をやってからトラオムさまは立ち上がりました。
「ぼきゅも…したかったー」
不満そうに呟くミニマムドラゴンは可愛かったです。
つい抱き上げにいきそうになるくらいには。
いかん、発作が起きそうだ。
「佳永姉、ほんとうに竜が好きだよね？」
「トラオムさまも人のこと言えないと思います」
立ち上がった後、一度は私の方へ走りかけていたにも関わらず弟の呟きを聞いた瞬間にだっこに戻ったトラオムさまには絶対人のことは言えません。
「えー、俺の場合はただの弟大好きお兄ちゃんなだけだもんね」
ニコニコ笑顔で弟を撫でまくるトラオムさまでした。
……超ブラコン健在。
「むが。……にいさまくしゅぐったいー」
愛されるガープさまは、不動の可愛さを保持しています。是非お持ち帰りをお許し願いたい。
ハグして寝たい。
むにゃむにゃと抗議するガープさまを見つめて、ほんわかと微笑む我々の心は一つでした。
ああ、癒される。
「では、これを」
トラオムさまと向き合いました。

念のために軽い体操をトラオムさまにして頂き、その後から始めたそれは訓練などというものではなく、身体遊びというのがきっと正しいものであったのでしょう。
けれど、それはとても楽しいことです。
もとより、苦しみながら修めることではなかったのですから。――我らの武とは。
「力を入れる必要はありませんよ」
ですがそうですね。――――足裏と骨盤と肩甲骨を意識して頂けるとよいかもしれませんね。
2枚の用意したタオルの端と端をお互いに握ります。
「ルールは一つだけ。――――お互いに向き合い片足立ちになって勝負します。両足がついたり、立っている足の位置がずれたりしたら負けです」
「はーい」
楽しそうにトラオムさまが返事をされました。どうやらやる気はあるようです。
「ガープさまは、そちらで合図とどちらの足が地面についたかを見ていてくださいね。とても大切なことですので」
「みゃい！！」
こちらも同じく、嬉しそうに返事をされました。
緊張のあまりか返事の言葉が猫語になっています。――――――
萌え殺す気ですか。
しばらく、ふるふると悶える両者のために勝負は若干遅れて開始されました。
だから、癒しは可愛いんですってば。

古武術と呼ばれるものの原理の面白さは、その躍動性と展開の豊富さにある気がします。
じつは古武術と呼ばれるものに、唯一絶対の正解は存在しません。
因果応報、類型、組織化、命題、――――　技術であると同時に、己の肉体を模索する術――――それは一つの概念であったのです、きっと。
「ちょ、待って。佳永姉」
「……どうしました？」
何も難しいことはしてませんよ？
「いや、だって。……なにこれ！！？」
「……にいしゃま？」
8度目のトラオムさまの負けを告げたガープさまが不思議そうに首をかしげていました。
……かわいいなあ、いいなあミニマムドラゴンかわいいなあ。
つい空気が和んでしまいました……迂闊。
「…で、何に驚いてたんですか？　トラオムさま」
「……あっ。――だって、だって佳永姉、この遊びすごくないか？」
ブラコンの権化といえるトラオムさまもまたそんなガープさまに心を奪われていたようでしたが、声かけで我に返ると酷く驚いた様子で言われました。
「……どう感じましたか？　トラオムさまは」
「…なんだか、二人で一つの生き物になったような。……羽が生えたような気がした」
俺、いまは人形なのに！
呟く少年は、本気でそう思ったようでした。
「……重心移動を力むことなく行えたとき、人形でも羽は生えるのですよ、きっと」

失われた人々の知恵は、きっと鳥になることも可能にしたのだろう。
不安定は力になる。
揺らしとシンクロ、構造、重心移動、バランスコントロール、体幹内処理、足裏の垂直離陸。――――６つの原理から生まれる知恵。技術。
おじい様、貴方の与えてくれた技術は私の生きるための術となって、いまもこの身の内に息づいていますよ。
……きっと、貴方がそう願ったように。

「――――カナ、きれい」
ね。
「……ガープさま？」
突如呟いたガープさまに尋ねました。
「……うごいてりゅカナ、……きれいにゃの」
きらきらなの。
「――――ガープ、さま」
気づけば、涙が溢れていました。
「ありがとう、ございます」
「？」
「佳永姉？」
噛みしめるように、その言葉の意味を辿る。
――――　この世界でも、私が愛してきた武は……許されたのだ。

「…カナ？　イタイ？　……くりゅしい？　」
「佳永姉？　……　つらかったの？　」
優しい竜族の子供たちに慰めの言葉を貰いました。
「いいえ。……すごく、幸せだなあと思ったのですよ」
答えた言葉は、本当のこと。
――――　私を育んできた世界が、いまとても近くに感じられたのです。

【み――――名乗り、】

◇◆◇

「トラオムさま。ガープさま。……やはりこちらにいらっしゃいましたのね」
気持ちのいい天気のなか、声をかけてきたのは女性でした。
「イオ・スさま！」
「あ、イオおかあしゃま」
陽が高く上り、陽気を増した中庭で静かに私と過ごしていたトラオムさまとガープさまが返事をされていました。
「……」
ぺこりと礼を返しました。
なにしろ、トラオムさまとガープさまの呼び声から判断すると、彼女は十分に敬意を払うべきお相手なのですから。
「初めまして。イオ・スさま」
「初めまして、佳永さん」
主人がいつもお世話になっております。
人見知りだという噂の竜族の長の第一夫人は、控え目な笑みをもって私に挨拶をしてくださいました。
…普段のバランさまへの自分の扱い方を知られたら、泣かれそうで怖いなあ。
内省しつつも、だからといって明日からの業務内容に変更はないだろうことを知ってる２８歳の落人だった。
なにしろ、大老であるチェイサさまや龍形種の代表者でもあるフ

アンリーさまに奨励されちゃっていますからねえ。
「イオ・スさま。どうしたんですかリフェールの傍を離れてくるなんて。……まさか、リフェールに何かあったんですか！？」
「え、リフェールにいさまあああ」
必死に弟を心配するトラオムさまとそんなトラオムさまの発言にさらに心配になって泣きだしたガープさま。
家族ですねえ。
「いえ。――リフェール、は大丈夫ですよ」
「そうですか、よかった」
「よかったああ」
腹違いの弟を心配した子供たちが、慌ててそれを否定したイオさまにほっとしたのが見えました。
このままだと、遊び相手は終了でしょうかね。
そのように感じながら、彼等を見守っていたのですが。
「私はリフェールに頼まれたのですわ。　いま、中庭にいるお二人と、――――一緒に遊んでいる人を連れてきてください、と」
イオさまの視線が、いつのまにやら私のほうへ向いていました。
「佳永姉も？」
「かにゃも？」
何で？
不思議そうに首を全く同じ角度で曲げた兄弟を見つめ、イオさまを見つめ、ついで確認してしまいました。
「……私、をお呼びなんですか？」
長の第二子であるリフェールさまが？
「そうです」
来て頂けますか？　佳永さん。
真剣な表情の彼女に、否など言えるわけがありません。
「はい…」

それ以外には、答えられませんよ。

イオ・スさまとトラオムさまとガープさま、それから私の４人がそれから向かった先は、リフェールさまのいらっしゃる夫人たちの居室でした。

カラン。

押し開いたドアの上で、素焼きのベルが鳴りました。

「どうぞ」

お入りくださいな。

白い布のサリーの下で、金糸の縫いとりを施した紫のガーグラが翻っていました。そこから覗く細い足首には皮で編まれたサンダルの紐が結ばれているのが見えました。

「こんにちは、リフェール！！」

トラオムお兄ちゃんだよ！

「リフェールにいさま、こんにちはなの！！」

ガープもおよばれしたのー！

ガープさまを抱っこしたトラオムさまがまずは先に入られました。

私の位置からではそんな彼等の後ろ姿しか見えてはいませんでしたが。
……確実に今のトラオムさまは笑顔だ。間違いなく、満面の笑みであるに違いない。
そう感じられる声でした。
「さあ、佳永さんもどうぞ」
招いてくださるイオ・スさま恐縮しながらも、白いドアを抜けて入室した私の眼が見たものは、鮮やかな幾何学模様の渦でした。
「……ああ、見事な絨毯ですね」
つい言葉が漏れるほどに、色鮮やかな曼陀羅装飾や、抽象デザインの絨毯がそこにはありました。
顔をあげると、今度は光を通す絹の布の間仕切り。
判りやすい原色を示したようなその染色した布たちに隠れるようにして、花や光が溢れていました。
――――いかに寝室は別にあるとはいえども、少しばかり賑やかすぎる色相ではないのかと思うほどに、この部屋には色が溢れていました。
病弱であると聞いていたリフェールさまが住まわれているのですから、病院のような刺激の少ない白を基調とした色相なのではないかと勝手に思っていましたからねえ。
驚いたのですよ。
「トラオム・バラン。ガープ・バラン。――――――元気そうで何よりだ」
我が兄弟よ。
高く低く響く、されど明瞭に届くその声。
「リフェール！」
「リフェールにいしゃま！」
稀にしか会えない兄弟に会えた歓喜に満ちた、二人のバランの一族の声。
私の背後に立つイオ・スさまは気付かれたでしょうか。

彼の背後で笑む長の第二夫人、ミランダさまは？
「それから、――――――ようこそ。竜の里の《落人》」
耳から浸透する。
膚は知覚する。
眼球の動きが固定される。
「……あ、」
あなたは？
全身が痙攣を起こすように震えていた。
その存在に怯えて。
「……初めまして、落人どの。――――――私がリフェールだ」
しとりと濡れた硝子の箱のような、透明で不透明な鱗。
もはや歩みも出来ぬほどに萎えて硬縮した四肢。
身を守る盾のように、弛緩して広がった尻尾は銀の色をしていた。
幼さを残す小さな竜の形をしたその存在は、閉じた両眼をうっすらと開ける。
眼についたその瞳は、黄金。
額に盛り上がった球体の小さな宝石もまた同じ色。――――――金。
「まさか、――――――羽ある蛇種？」
呆然と呟いた言葉が、優しい女性たちの悲しみに触れたなんて。

思ってはいなかったのですよ。
ごめんなさい、イオ・スさま、ミランダさま。

「それは違うな。――――――　我は、まだ竜形種だ」

6歳の筈の、その小さな仔竜は答えた。

その仔がバランの名前を継いでいなかったことを知るのは、――
――――まだ少し後の話。

【よ――――迷い、】

∴∴∴∴∴∴

「――――何をしにいらっしゃいましたか？」
問いかけたのは私から。
答えたのは、たった一人。
「ああ。――――俺の未来を奪いにきた」
もう会うつもりもなかった竜族のリアディはそう答えました。
「……」
俺の未来って、……。
ため息を我慢するのも苦労しました。

言葉があったのです。
手紙が一つ。
私のもとへと、届いたのです。

『カナ。　――――――　おまえを奪いに行く　』

通達された彼の思い。

ねえ、あなたは私の何を奪うというの。
ねえ、あなたは私の何を欲するというの。

――――――　私の未来（さき）はどこにあるの。

答は、

いつも闇の中。

◇◆◇

「小さな皿がある」

「はあ……」
「そして、そこにはスープが満たされている」
「ええ……」
どうもよく分からぬ説明が始まったようでした。
「リフェール、次は俺と喋ってくれるよね？　ね？」
「ボクとも！」
「静かにしなさい！」
少し離れた場所で、トラオムさまとガープさまが困った表情のミランダさまに確認している声が聞こえました。
布の仕切りで分けられたのは、私とリフェールさま、イオ・スさまの三人だけでした。
「スープはすでに皿に溢れていて、料理は完成しているように見える。――だが、そこに未知の食材が落とされる」
「未知の食材？」
「そうだ。――――　完成しているように見えた料理は実は欠損した料理であり、そして未知の食材は、遠い過去に失われた料理の素材の一つであった」
「失われた…」
「欠損した料理は補完されることを望み、失われた素材を呼びよせる。――――　ふさわしい場所へと」
全ては、それがはじまり。

「――――　料理がお好きなんですか？　リフェールさまは」
苦肉の相槌でした。――しなきゃよかったかと即座に思いましたが。……沈黙は金か、雄弁は銀か。――――　さて。
「……わからなくてもいいが。――――　失われた素材はもちろ

ん、その料理をあるべき姿に近づけるが、問題はその素材は料理の調和を壊すことがないのかという心配があるということだ」
もっとも、今回はその心配はなかったようだが。
自己完結でなにかわからない説明をされたリフェールさまに、一つお聞きしたい事があります。
……本当にあなた６歳ですか？

うるんだ瞳で我が子を見つめているイオ・スさまと、喋りつかれたのか再び眼を閉じたリフェールさまに会釈をして部屋を去りました。
「リフェール、寝たんだったら俺も一緒に昼寝する！」
「ぼきゅも！」
三人兄弟そろって昼寝にはいった竜族の子供たちを置いて。
「イオ・スさまも一緒にお休みしません？」
「えっと。……そうですわね、ミランダさま」
仲良くそんな会話をされた第二夫人と第一夫人の声を遠く聞きながら。
何かを求めたのか呼ばれたのかそれさえ分からぬままに、私は天を仰ぎ見ました。

明るい太陽の輝く空。

今でも、あの高き天の上には異世界への穴が存在しているのでしょうか。

私の故郷へと続く道が。

【いつ――希まれ、】

∴◇∴

「――ここはどこだっ！！」

天空からの落下スピードを和らげようと着ていたシャツの前を外した。

思ったよりも柔らかかった地面は、心なしか暖かかった。

どこかもわからず、手にしたデッキブラシを構えれば、そこには蛇の群れ。

反射的に手にした武器を振るまえば、蛇たちは眠りについた。

いかに事前に防ごうとしたとはいえども、着地した瞬間の衝撃の全てが相殺されていたわけではない。

筋に走る痛みをぴりぴりと感じながらも、意識的に筋肉を絞めることでそれを抑えた。

警戒心のなか、暗闇からかけられた声。

「――――これは面白い」

濃い緑の匂いが立ち込める森の中で。

出会ったのは、奇怪なるかな人外の存在。

「あなたは…？」

木々の呼吸が満たす、深い深い森の中で。

濡れた土の匂いがこもる土の上。

世界から落ちた人が――――　問いかけた。

「私がおまえを保護しよう」
答えたのは、人外。
ブルーブラックの髪。
黒々と反らさぬ眼差し。
ぴんと背を伸ばして相対した、その青年の声は低く耳に忍び込むように聞こえた。

風が吹いて、世界が変わっていたことを理解した。

ねえ、貴方。
ねえ、ご主人さま。

――――――私ずっと、あのときから知っていたのよ。判っていたの。

「…貴方はだれ？」
「私か？　私は竜族のリアディ。……ただの商人だ」

握りしめてきたその手は震えていたわね、貴方。
もう放さないと、迷子がようやく探していた親を見つけたかのように。
貴方のその手はつよくつよく私の腕を掴んで放さなかった。

「…痛いわ」
「――ああ。　…すまない」

少しだけ緩んだその手は、それでも決して離されることはなかった。

ねえ、貴方。
ねえ、ご主人さま。
本当は知っていたんでしょう？
私がずっと恋しがっていたことを。
故郷へ帰らなくてはと思い願っていたこと。
――――――貴方を毒づきながら、芽生えかけていた心を殺そうとしていたこと。
日常へ帰るために生きることを選んだ。
生きるために、働くことを選び、知恵を絞った。
異世界だなどという夢のような牢獄で、狂わないために癒しを求めた。

『おまえの精神はどうしても弱いな』
師匠である岩倉宗吾は過去の稽古の間によく言ったものだ。
『……あんまりじゃないですか？』

過去の自分は、もちろん意義を申し立てた。
『事実だろうが』
環境の変化に弱い。情に弱い。虚無に弱い。――――夢に弱く、興に弱い。
『ようは優柔不断。――――判断・根拠が弱いということだな』
それは、夏のある日。
緑が濃い影を地に落とし、涼風が次に通るのはいつかと膚が願っていた一場面。
『……』
あまりの一刀両断っぷりに、反論も忘れた日。
『まあ、そんな輩は山のようにおる。おまえだけではないわな』
『慰めのつもりですか？』
『まさか』
なぜワシがそんなことをせにゃならん。
『……』
そうでしょうとも。
あまりにも説得力に満ちた祖父の発言だった。

ちりん、と母屋の縁側で風鈴が鳴るのが聞こえた。

『弱いものは仕方があるまい。いまさら、そんなことを鍛えろということも出来ん』
ましてや成人済の不肖の弟子になんぞ、言葉なんぞで言って変わるわけもないだろう。性格なんぞ。
『性格（思考のクセ）は変えるもんじゃない。本人が変わろうとしたときにだけ変わるもんじゃ』
齢７０をとうに超えたクソジジイは達観した口調でただそう述べた。

『大切なのは、今の自分が何処にいるのかを理解しているかということだ。――――いきたい道へ行くがいいさ』

夏の空気のなかに聞こえた言葉を覚えている。

『――――おまえの根には、すでに岩倉の武が宿っているのだから』

『岩倉佳永』として生きていく。

それだけが、私に望まれていた答だったから。

【む――――暴かれて、】

∴∴∴◇◇◇∴∴∴∴∴

地を踏みしめろ。
廻る世界に置きこぼされることもなく。

地を踏みしめろ。
生きる場所を選択しろ。

――――おまえの満ちる日々を得るために。

「どうして来たんですか。リアディさま」
尋ねた言葉に呆れがなかったとはいうまい。
「…逢いたかった」
では、答えた言葉には？

「どうして、そんなに。……私を――――望むのですか」
壊れた笑いも、枯れた情も。
すべてすべてなぎ払って。
――――思い捨ててくれたなら、よかったのに。
そんな思いが私の中にあったのに。
それでも彼は言うのです。
「おまえだけに――会いたかった」
独りだけ、全てをもう乗り越えたような顔をして。
私の悩みも全て。
全て、――――――――――――貴方が持って行ってくれたならいいのに。

「……ああ。――――やはり、私は貴方が嫌いで嫌いで大好きですね」

心からの素直な感情を言葉へと置き換えた。

誰よりも、私の心の弱さを照らし出す存在。

――――――ご主人様（リアディさま）が　きらい　です。

【なな――――打ち捨てて、】

緑の色が風に揺らぐ。
誰もいない場所で、ただ語りあいたかった。

「……館の皆さんは元気ですか？」
遠くで遊ぶ子供たちの声が聞こえた。
そんな城の窓辺に立ち寄って、リアディさまに尋ねました。
「ああ。――――元気だ」
低く耳に届く声。
風が渡らせるのは、竜の声。
それから。
――――輻射される貴方の息と肌の、熱。
「よかったです」
過去に世話になった方々の事を思い出しながら笑顔で返事をしました。
もう、過去を思い出さぬようにと己の心を戒めながら。
「……ウルティカの話だと、ちいさきものたちは一時期眠れないほどにショックをうけたようだったということだった。それでも、メイドたちの声かけや世話が効いたのか、少しづつ食事を摂り、睡眠をとるようになったということだ。――――いまの彼等の合い言葉は、【カナお姉ちゃんが帰ってきたら、笑顔でお迎えするよ！】らしい」

「……」
「トールとレイヤは、いまはメイムの下で手伝わせている。彼ら二人も十分良く働いてはくれるが、それでもいざというときの判断や実務能力についてはまだまだだというのが二人の言い分だった。――【アニキが全ての指示を出してくれていたからこそ、俺らは安心して働くことが出来たんですよ】と言っていた」
「……」
「メイムはあいかわらずの仕事ホリックだが、最近は小言が多くてたまらん。【だから、さっさと優秀な人材は確保しておきなさいといったでしょう】だと。…あいつもカナのことは認めているようだ」
「……」
「――――――　皆が待っている。……帰らないか？　館へ」
困ったような表情のリアディさま。
いつも堂々と胸を張って、予想外の仕事を押しつけてきたリアディさまだから、――――新鮮です。
「まず、一つ目に私が城へとやってきたのは城からの召喚があったからです。――――　この城にて生活しろと竜族の長であるバランさまからの命令があるからです。私の意志による滞在ではありません」
知っているはずですね？
「……」
文を届けたのは、リアディさま。――――――貴方ご自身だったのですから。
「二つ目に私の存在を皆様が好意的に受け止めていてくださったことはとても嬉しいです。一年の間の仕事を評価していただけたと思うとそれだけで嬉しい。これもみな皆様のご協力とご指導のおかげでの成果でした。本当にありがとうございましたとお伝えください」
「……」
「最後に」

一瞬言葉をきって、リアディさまの瞳を見つめた。
黒い瞳。――――――私と同じ、日本人の瞳と同じ色の瞳。
「私の帰る場所はたった一つです。――――――岩倉武道館の本流である岩倉家。――――第２６代目当主　岩倉宗吾の居る場所こそが、私の帰るべき場所です」
帰りたい場所は、――――　いつも一つだった。

「……リアディさまには本当に感謝しているんです。何もわからなかった私を保護してくださった。ただ居場所と物を与えるだけでなく、私が協力出来る仕事を与えてくれて、私の考える意見を聞いて受け入れようとしてくださった。――――それがどんなに幸運なことであり、満たされたことであったのかはよくわかっています」
それは本音の言葉。
与えられるだけの人生などに興味はない。
何かを作り、誰かと繋がり、生きる道。
そんな人生でなくては、長い人生を歩む勇気などもてるはずもない。
そのために必要な環境が、異世界などという未知の場所であたえられたことを感謝しないはずがない。
たとえ、長がいうように「落人」という希少にして望まれる存在としてたとえどのような種族であっても、「落人」というものが保

護されるべき存在だったと説明された今だとしても。
何も知らずにただ混乱していた私の前に顕れたのは彼（リアディさま）であり、他の誰でもなかったのですから。
———感謝しているんですよ。
他でもない、私が一番揺らいでいたあのときに傍にいてくれていたことに。
けれど。
「私は不器用なんです。————— 私の大切な場所は二つはいらない」
あなたたちはいらない。

最後に嘘をつきましょう。
許されることもいらないから。
嘘をいうことしかできぬ女だと諦めて。
願わくば。
頑固で狭量な女が一人、差し出されていた優しい善意の手を振り払ったと理解してほしい。
たとえ、それが虚勢であるとばれていても。
———もはや、壊れた偽の関係さえも放棄してください。

風が緑を浚う音も。
水が日の光を反(かえ)す名残も。

――――　帰る場所と相似しすぎていて。

涙が落ちそうになる。

伏した瞳から

【や――――相対しましょうか】

「イヤだ」
意志は否定された。
間近に寄った顔はあいもかわらずの美しい顔。
この異世界においての上位種である彼にとって、私の思いはつつぬけなのではないかと疑念を持ったのはいつのことだったろうか。
「…リアディ、さま？」
掴まれた手首は痛かった。
あの日のように。
「俺は、おまえが欲しい」
ゆっくりと言い聞かせるように彼は言った。
「おまえの意志などもう知らない。優しさも遠慮もしない。憎むなら憎め。恨むなら恨め。――――泣いてもいいから」
「　俺のそばにいろ　」
熱は伝播していくのでしょうか。

貴方の声が。言葉が。
私のなかの熱情を呼び起こす。

「　ふざけないで　」

――――　私のなかの、　怒り　を　呼び起こす。

「ふざけないで」
怒りの声は低く低く、腹の底から湧いて出ました。

「私の意思などもう知らぬと？　どの口がそれを言うです！　――――　わたしの意志がどこにあった。この世界で生きようとしたこと、それは私の意志でありました。たとえそれしか手段が残されていなかったのだとしても。――――春をひさぐわけでなく、知恵を生かし

て仕事を得られたこと、住処も衣服も食事も用意されたこと、それは確かに幸いだったでしょう。不自由はなかったでしょう。何一つ不足はなかったように思えたでしょう。――けれど、私の選んだ道はここにはないのに。――私の家族は、此処にいないのに」

死すらも看とろうと決めていた家族がいない。――私が背負うと決めていた、命が、ここにはないのに。

「……」

「人が落ちるのは世界が決めたこと。――だから、誰にも言うつもりなどなかった。このような泣きごとなど。――だって、そうでしょう。誰にそれを告げる意味がある。誰のせいでもないのに。誰の量り事でもないのに。罪など誰にもなかったのに！！　――なのに、誰かを責めずにはおられぬほどに私が弱い。――心が、弱い」

ぽつり。

ぽつりと歪んだ視界。

うるんだ皮膜。

――――――――ああ、嫌いだ。

……弱い自分が一番嫌い。――涙で終わるだけの娘でなどいたくないのに。

幼い私に武を修めることを望んだのは、おじい様だった。

『いいか。人は可能性を持った生き物だ。自由を求めながらも新しい制限をつけることで、更に質を高めることができることを体現してきた。――――　今の自分を認めたうえで、その上を求め、渇望しろ』

そうすれば、きっとお前にも判る日がくる。

『……何がわかるの？』

記憶の片隅。――中庭の一角で師と行った武の修練。
拳の前へと視線を渡しながら、尋ねたのは幼いわたし。
汗が首を伝う感触があった。
腕の筋肉がぴりぴりと痛むような抜けるような感触も覚えているのに。

『――――
』

祖父の答だけが記憶のなかへ埋没している。
あの日、確かに祖父は教えてくれた筈なのに。
私が修めるべきことを。

踏んだ。
右の肢を強く踏み、生じた力を前へと送った。
「！」
ぐいと持ち上げるようにリアディさまの肩を押しやり、準じて掴んだ腕をまわす。

「寄らないで。――――あなたが欲するものがどんな獣かを教えてあげましょうか？」

涙は散った。
風が吹いて、零れた筈の涙が何処へ行ったのかも誰もわかるまい。
愛など要らぬ。
恋など要らぬ。
執着も尊敬もすべてすべて吹き飛ばして。
――――――　私は、獣になるのです。

「ぞくぞくする。――――俺はお前が欲しいよ。　佳永　」

熱さえも籠った声で、捕まえた男が喋った。

「逃げるな、と俺は言ったのにな」
ひどい女だ。

そう囁いたブルーブラックの髪の男の頬笑みに、ここがなんの世界だったのかを思いだしました。

「――――　逃げる獲物がいるのなら、捕まえるのが獣の性だ」

片腕を掴まれたままで、私をそのまま抑えようとした男の本性は、竜という名の【獣】。

「……捕食される気は、ありません」

掴んだ棒を相対した獣に向けて構えた。

――――此処は【獣の世界】。

【ここの――揺らいで、】

◆

夏の日。
蒸し暑い故郷でのこと。
打ち水をした庭に立つ祖母は言った。

「そうね。――――――　貴女が孤独に餓えないことを祈っているわ」

ぱちりと、祖母が手に持った鋏は庭に咲いていたアザミを断ち切った。
祈りでもなく、懇願でもなく。
ただ、…ただ一言。
優しくも厳しい人は告げた。

生命の賛歌を謳う蝉が木に隠れ、
緑濃い夏の木陰には忙しく働く虫たちがいた。

父母の墓参りのための花をしつらえながら、穏やかになってしまったその笑顔を浮かべる人が何を見ていたのかはわからないままだ。
およそ８０年の祖母の人生が作り上げた魂が見つめる先を、その半ばも超えない若輩者に判る道理もない。

時は巡り、立場は変わり、世界が揺れて。
ここにいるのは私だけ。

◇

目の前を棒が横一線と化して通過していった。
それはもはや『薙ぎ』ではなく、『斬り』ではないかと竜族のリアディは心に思う。
竜族の身体能力は高い。
それは竜形種、龍形種、のいずれをもっても認識されている事実だ。

龍形種よりもやや物質的な意味においては弱いとされる龍形種の場合であったとしても、雲下の雷を受け流し、竜巻によって舞いあげられた数多の廃棄物の直撃をものともせぬのだから、それは当然の認識であると思う。
その優れた竜族の反射神経で突き出された棒の軌跡をかわしたリアディは先ほどから感じる身の奥の震えを善きことと感じた。
風が渡る緑の中で踏み出された、彼女の牙。

獣となって叫ぶといいのに。

――――彼女と出会ったそのときに、そう思った自分がいたことをようやく認識した。

風が斬られた。
土が舞って。
緑が揺らいだ。

――――――――――　水が歪んで、夜が瞬いて。

何かが落ちてきた。

【ひと・たり――能力、】

リアディは竜族においてやや特殊な出生を持つ。
彼の本性は間違いなく竜形種でありながら、彼を育てた家族は蛇族であった。
父に大蛇たるエンを持ち、母に落人たるヨウコを持つ。
弟妹には父と同じ蛇の種たるメイムとマリアムを持つ彼は、竜族のなかにおいてですら異端であった。
秘された彼の誓言がある。

「けして、属性の力みだりに用いず。竜の一族に反せず」、と。

彼は幼い日、竜の一族の城で誓ったのだ。

「ファンリーさま？」

ここはどこですか？
幼い彼は、住まいである場所を離れて父母の友である竜族龍形種のファンリーへと問いかけた。
彼の手を引いた女性とは親しい間柄だ。
なにしろ、彼女は彼の「導きの手」でもあるのだから。

リアディの父母は彼を産み落とした竜族ではなく、彼を拾い育て上げたエンとヨウコだと彼は理解している。ソレを否定するものを彼は赦さない。
しかし、竜卵のまま彼等に引き取られた彼が卵より生まれ落ちるには必要な存在があった。
それは竜族。――――彼と同種の存在である。
竜の卵は硬い。
それゆえに、卵は親の産み落とした場所で問題なく過ごすことが出来るのだが、しかしその硬さは逆にうちにいる児一人では生まれにくいことがわかる。
不思議なことに、竜は竜を知る。
そのためか、たとえ人里離れた場所に産み落とされた卵であっても発露の時期になると竜の成体がその子の出生を手伝うことが多いらしい。
竜族は生まれると同時にその能力を発するというが、しかしそれは無事に生まれたあとでこそだ。
生まれる際の竜卵の外よりそれを導き、能力への同調を教えられて能力を開花するが故の事実。
その際に児の出生を導き、同調を教える竜族の成体。――――それを竜は〈導きの手〉、あるいは、「導手（どうしゅ）」「導親（どうしん）」と称する。
森林に産み落とされていたリアディの竜卵を拾い上げたヨウコとエンの紆余曲折な物語はともかく、結局のところそのままリアディ

は彼等の保護下に置かれることになった。
　これもひとえに友人の存在ありきだなとエンが呟いたのを、彼女は知っていたのか知らなかったのか。
　とにかく、その頃まだ長男（メイム）も授かっていない頃の話なので家族が増えることを彼等は喜んでいた。
　時折邸へ訪れる竜族の友人に、仔竜の育て方講座をうけたりしながら。
　もちろん、その時点でリアディの導きの手に自薦してきた友人（ファンリー）であったことはいうまでもない。
　生まれたばかりのリアディは、土を纏い水を呼んだ。
【予測通りの複属性持ちね…】
「……ほんとうにいたんだんな、複属性…」
「泥はばっちいからめっしなさい！　めっ！」
　貴重な水属性と土属性の持ち主であるのを把握して呆れたのは、竜族が一人、大蛇が一人。
　ちなみに、いまだにこの世界の慣習とかにうとといままの農業ミセスは素直に沐浴させなくちゃとか呟いたとか。…どの世の落人もマイペースである。
　さて、後に告げることはとくにはなかった。
　竜族は生まれた時点から自我を持つ。むしろ、生まれる前から周囲の気配を察知しているふしがある。
　いささか、落人であるヨウコの影響（あるいはヒッキーな大蛇のエンの影響）で変わった視点をもつ少年へと育ってはいたが、それでも彼ら三人の生活は平穏であった。
　農業を喜びとする母ヨウコの手伝いで畑をしていたときのことである。間引いたはずの小さな実を握りしめたリアディの手の中で実が成長した。
　……そのときのリアディの心境はヨウコ譲りの異世界風エコ精神「もったいない」の一言だったらしいのだが。
　とにかく。

畑でのその出来事は、ヨウコが「よくやった」とリアディを褒め、夕餉でその話を聞かされたエンが窒息しかけ、ファンリーをはじめとする竜族の大身たちが彼を城へ招聘する事態へと結びつく羽目になった。

全くもって話題の突きない大蛇の一家の日常風景、すなわち通常運転な事態である。

招聘された竜の城で、リアディは誓った。

土の竜にして水の竜。――――そして、木の竜でもあった彼がその能力を乱用せぬことを。

竜は世界の均衡を崩してはならない。

それが彼等が定めた掟だったから。

【ひと・ひと――不去《さらず》、】

後見人はファンリーさまで。

竜族のリアディが選んだ職種は商人だった。

「ふむ。――――　つまらんな」

【ご主人さま。どうかいたしましたか？】

「……いや。もう、あれから１５年かと思っただけだ」

【……？】

「…なんでもない」

不思議そうに鎌首を傾けたのは、保護下にある蛇族の一人。

父母の影響か異端の故か、リアディの邸にいるのは同族である竜族ではなく、蛇族のものばかりだ。

成人した部下しかり自然に集ったちいさきものたち然り。

彼の周囲には懐かしい人が焦がれたように、鱗きらめかせた土の上の生き物たちだけだ。

山の中を涼みながら帰る道すがら、ふと天を仰いだ。
空。
――――――　あの人たちを送ったのは黒い夜空に赤が散ったその日。

「よし。なかなかいい手つきよ、リアディ」
「ありがとう、ヨーコさん」
「…お駄賃目当てでも、いまだにミミズに怯えるエンよりも農夫にむいてるわ」
黒髪を後ろで結んだヨーコさんはそう言い切った。
汗ふき兼用日除けのタオルを首にかけて、弁当と水筒とともに日陰で座っているエンさまに三角になった眼で睨みつける彼女は立派な農婦であった。
（…長いものにはまかれろっていうしな）
育成中の夏野菜の茎に添え木を連れ添わせるリアディの手はマイペースに進んでいる。
「メイムとマリアムはまだ外気に触れさせるには早いですからね。エンさまには二人を見ていてもらわないと」
俺の弟妹が無事に体温調整が出来るようになるまではさ。
メイムとマリアムはまだまだ小さき者と呼ばれる幼生体のみ。兄であるメイムですらとぐろを巻くことも出来ないほどの小ささなのだし。

「〜〜〜〜んん、可愛いわリアディ！　そうね、お兄ちゃんだものね！　弟妹は護ってあげなくちゃね！」
がしっと抱き寄せられた。
おかしい、どこが彼女の地雷に触れたんだろう。
無言で抱きしめられつつも自分の言動を振り返る少年だったが、所詮落人であり女性であり、なにより義母であるヨーコの言動を把握することなど一朝一夕で出来るわけがない。
エンやファンリーあたりなら、なんとなくで把握に至れる心境にまでそろそろ到達していそうだが。
とにかく。
「……ヨーコさん。……添え木と茎が折れましたが」
手にしていた玉蜀黍の若木には力強く生き延びていただきたいと思う。
今夏の我が家の食卓のために。

一人で来なさいと言われたものの。
竜とはいえども齢7つのしがない少年がどうすれば、蛇（かがち）の里の奥深くから、更に奥深い竜族の群れの生息地にこれるというのか。
ましてや、城などという場所には聞いたことはあっても訪ねたことはない。
どうしようとも、大人の介添えが必要である。
という流れをくんだイイ子は、父母の友であるファンリー女王（ちなみにこの呼称は大蛇一家限定のものである。他のものがこれを呟いた場合、確実に一族総員夜逃げものだ）に付き添いしてもらえ

ばいいんじゃないのかなどとは簡単に考えていたのだが、どうやらそれでは不足であったらしい。
「はいはいはい！　母子そろっての竜宮訪問を希望します！」
「……ヨーコ」
「……ヨーコさん」
竜の城は竜宮城ちがうよ、マミー。
真顔で呟いたのは、冷静が売りの筈の弟（メイム）だ。
でも、たぶん普段使わない妹限定（マリアム）幼児単語「マミー」が発せられたあたり弟の混乱も素晴らしい模様。
「ヨーコさん、畑の水やりどうするつもりで？」
「エンにさせるに決まってない？」
俺が述べた問いに、母がいい笑顔で答えた。
インドアな父は、いまごろ薄暗い自室でインドアの名にふさわしい白肌で模型作りに勤しんでいるはずだが。
……まあ、最低限程度の畑の世話は、それこそリアディが養子になる前からヨーコさんに叩き込まれて来てたはずなので問題はあるまい。
「――エンさまに一年分の食材（育成中）を任せるヨーコさんが一番こわいです」
「父親の尊厳というものを子供たちに理解してもらうためにも、ここはがんばってもらわなくちゃね」
エンには。
笑顔で述べる母の顔が、妻としての家庭への危機感に満ちあふれていたことは言うまでもない。

【ひと・ふた――城、】

「はじめまして。蛇の落人…いや、大蛇の落人・ヨウコどの」
そして、竜族のリアディ。

城の玉座に座る人の名をバランというらしい。
目の前で笑って見せる人型の竜族、バラン・ロウ。――彼が、現竜族の長。
少し頬のこけた彼は、よく似た顔の青年を傍につけたままでリアディとヨーコへと声をかけた。
「はじめまして、竜の長（バラン）どの。お逢いできて光栄ですわ」
「…はじめまして」
母を後ろに庇いながら言葉少なく挨拶したのは、幼いながらも男の子だったリアディの意地である。
「ほほ、これは孝行な息子どのじゃな」
その姿を見て呟いたのは、赤髪の青年姿の竜族。
「ヨーコとエンさまの御子ですからね」
応じたのは、父母の友人であるファンリーさま。
「……」

バランの後継か、長と同じ銀髪の年若い青年は沈黙して控えるのみだ。
「よい性質の子じゃ。これならば、特に問題はなさそうだな」
長が語る。
……何故人を呼んだのかをまず教えろ。
いらっとしたのは幼いリアディだった。
遠い道のり、しばしばかりの休息を終えて、やってきたら長々とした社交辞令。幼い身には、それは辛かろう。
ちなみにリアディが城へ招聘された理由については、付き添いとして竜の城までついてきて下さったファンリーどのには【内諸ですわ☆】としかいわれていない。
……父(エン)は予測がついているようすだったが、何しろあのへたれなお父上殿である。予測といえども断言する勇気はなかったようで、【……そのうち、わかるよ。リアディ……はははは…】との答しか与えてはくれなかった。
件の日の夕食で窒息しかけて以来、地味にリアディを家の外へ出そうとしなくなった理由についてもいまひとつ不明なままだ。
あれか、箱入り息子にしたかったのか、まさか今更。(反語)
誰とは言わないが、現実的な義母の躾とかとかによって、すでに勘定とか利益とか濡れ手に粟とかそんな言葉を身につけているリアディがいまさらきらきらめらめ箱入り坊ちゃんになれるはずがないことは理解されているはずだったので、とにかく文学的にその気もちを表現してみたリアディだった。
「リー坊、遠くを見つめるんじゃありませんわ」
「ぐえっ」
うっかり、ここ最近の義父の挙動不審を思い出していたら、ファンリーさまに力一杯、脳天をはたかれた。
「褒めた端から意識をとばしてどうするんですの。不甲斐ない」
笑顔に怒りが透けて見えた。
これだから、家族同然の付き合いの小母さまは始末に悪い。

「やあだ、ファンリーったら。そこがリアディくんの可愛いところよー。エンとはまた違う可愛さがあるんじゃない！」
「ヨーコも天然の惚気はいらないわよ！」
頭上のママ様ズが怖い。
ヨーコさんは、ファンリーさまが大好きなのでこの人がいると警戒もなく駄弁りにはいるのだ。
しかし。
……いいのか？
一応、ここは天下の竜族の本拠地なんだが。

「ほほほ。女子は元気が一番といいますからな」
「仲良きことは善き哉」
「……」
男たちは素直にそれを見守っていた。
どうやら、これでいいらしい。
女尊男卑？
いえいえ、たんなるへたれです。――――――　大蛇（うち）の男どもと一緒か、竜族も。

【ひと・み――――眩み、】

竜族のリアディは卵から生まれた。
始まりの場所は、蛇の里の人里離れた森の中。
親と呼ぶにはもう縁遠くなった存在が産み落としたその場所には、土の慈愛と樹の恵みと、水の憂いがあった。

「……これは、また」
「ふむ。――まだ、このような場所がのこっとったか」
踏みしめればふかふかの黒色土の上には、まあるくついた卵の跡が残っていた。

竜配達便の《速達便》を使って、竜族の大身の一人のファンリーのもとへ友からの手紙が来たのは昨日の事。
あら珍しい、とその身を起こして受け取った手紙には一言。
【ヨーコが、ヨーコが、ヨーコがあああああ】
最後の文字は涙で滲んでいた。
「……」
沈黙のあとでベルを鳴らして。
優雅に朝食を摂取した後で、「数日留守にするわ」と言いつけて、空に舞ったのはお約束。
———ヨーコは今度はどんなトラブルを巻き起こしたのかしらと、心で何度事前に予測をつけても裏切られることしかない心の防壁を築きながら、友たちの自宅へと龍形種の娘は宙を急いだ。
そうそう。
蛇足ながらに付け加えると、エンからの【ヨーコが！】お手紙を、ファンリーは【非常事態宣言（エマージェンシーコール）】と呼んでいる。
———　そのまんまだねとエンから納得を示される日は、たぶん近い。

「で、何がありましたの」

「なにもないよ―」

「……」

【……】

【ファンリーお姉さん、いらっちゃい】

開口一番、尋ねたらにこにこ笑顔でヨーコが返答した。

沈黙してるのは、長子のリアディと次子のメイムだ。

可愛く挨拶したのは、大蛇一家の最後の良心というか癒しのマリアムである。

そして、ファンリーをお姉さん呼びするようにチョウキョウ…もとい、保身…もとい、……きょ、…教、育？……したのは、…大蛇のパピーだ。落人のマミ―にはそんな気の利かせ方という小技は存在しない。

「…エンさまは？」

「エンはいま休眠中。――なんだかしらないけど、ファンリーへのお手紙を出した後、いきなり気を喪ったの」

どうして、あんなに気が弱いのかしらね～。不思議。

「……」
「……」
【……】
【……マミー、パピーきらいなのー？】
「うーうん、大好きよー」
エンもリアディくんもメイムくんもマリアムもねー！
【マリアムもマミー大好きー！】

きゃっきゃっきゃっきゃ。

バックに花が咲いていた。
大蛇一家の女性陣にはそういう機能が付いているかのようだ。

そんな二人を眺めたのち。
沈黙を守る二人の男性陣（未成年）をぐわしと捕まえた美貌の龍形種ファンリーさまは。

【――――　叩き起こしてらっしゃいな】

凄艶とも形容できそうな怒りの笑みで、下知を下した。
女王さまと呼びたい部下の気持ちがよくわかると、後年のエンがよく呟いていたものだ。

「……ああ」

深いため息とともに、水を大げさにぶちまけられ、お肌に小さな蛇族ちゃんの咬み後を残したエンを前にして、ファンリーは呟いた。

「――――――――――――――――　また、トラブルですのね」

すいません。

土下座したエンの姿はそう告げていた。

…眩暈が、する。

【ひと・よ―――　夜の内、】

さて、何度でも語ろう。

竜族のリアディは、大蛇のエンと落人のヨーコが拾った。
彼らには害意はなく、善意しかなかった。
竜卵のなかの彼が、ソレを知っていたのか否かは誰も知らない。
ただ誰もが知っていることは、彼が彼であるためにその家族は必要だったということだけ。

「さあ、今日はファンリーと語るわよー！」
「…ヨーコ」

場所は、竜族の城と呼ばれる長の住まいの一角。
今回、客人扱いでやってきていた蛇族は大蛇の妻子、ヨーコとリアディが与えられた客室だった。

「たまには女同士の会話しようよ～。お母さんも楽しいけど、やっぱりたまには恋バナしたいよ」
「……いえ、その場合の話の恋バナの主役は私しかいないのだけども…」
「だから、それが訊きたいのよ！」
「……あいかわらずの理不尽ですわね」
ため息ついているのは案内人のファンリーである。
城に自室の一つくらいは確保している大身の一人である彼女だが、今回は大切な友人にして眼の離せないトラブルメイカーであるヨーコとリアディを思って一緒に客室へ泊ることを選択した彼女は、なかなかイイ女である。
「ですけど、さすがにリー坊にまで巻き込む気はありませんわよ、わたくし」
ましてや、自分の恋話など。
さてもかくやとばかりに、幼いといえども男の性をもつリアディに自分の恋を語る気はさらさらないと告げるファンリーの気持ちはよく分かる。
女同士であれば些少のあけすけない話も抵抗はないが、今後の事を思えばそれは遠慮したい。
「大丈夫。今日はリアディくん、さっさと寝かすから」
「……」
「ヨーコさんって…」
理不尽。
いい笑顔で述べるヨーコの側では微妙な表情の少年がいた。
その後、美味しい夕餉も終え、寝る準備が終わったと同時に布団へと連れて行かれた彼はというと、
枕元でじっと寝るまで見つめられながらなんとかいつもより早い時間の就寝が出来た。
ヨーコさんひどいというよりも、怖い。
彼の心境はまさにそれである。

「…で？　で？　最近付き合ってるのはどんな人なの？　幾つ？　かっこいい？　付き合ってどれだけ経つの？」
「　…いえ、まあ。――――今の相手とはちょうど3月ほどの付き合いで…」

眠りに就いた後の続き部屋での姦しい女たちの会話は、幸い少年リアディの夢には出てこなかった。

「…あ、れ？」
むくり。
よく寝たという熟睡感で身体を起こしたら、実はまだ夜だった。
よほど寝具が身体にあっていたのか、それともただいつもよりもはるかに早い就床時刻に起床時刻がずれこんだのか。
どちらにしても、二度寝するには無理のある状態だった。
「…ヨーコさん？」
子供用のベッドの横にある大人用のベッドを覗いてみたところ、気持ち良さそうな顔で寝ている女性が二人。
「……ファンリーお姉さん、ごめんなさい」
追加で用意させていたファンリー用の予定だったベッドは無用で

終わったらしい。
あの体勢を見る限り、酒で潰れたヨーコをベッドに運んだら、そのまま胸に抱きかかえられたというのが正解だろう。
ヨーコさんって、抱きつき癖があるんだよなー、特に寝るときとか。
経験者でもある養いっ子は心の中で呟いた。
その後で、彼が部屋の外へと歩き出したのはなぜだったのか。
ただ、何かに呼ばれた気がしたのだと。
――――　彼は、未来にこのときのことを振り返る。

【ひと・いつ――――慈しむ、】

「――どうするべきか」
心の汗を垂らしつつ、少年リアディはあたりを見回した。
時刻は夜の内。
彼がさまよっているのは竜族の城の内部だ。
そう、まちがいなく彼は迷子だ。
寝が足りてしまった少年がちょっとばかりの記憶をたよりに部屋を出たのは一時ばかりまえのこと。
迷子になるほどの広さでもなく複雑さも感じなかったはずの城は、夜の内は袋小路に変化するらしい。
「まさかの、迷子。――――とうとう、エンさまの方向音痴が俺にもうつったのか」
やばい。
養い親（男親）に種族的迷子な蛇族のエンをもつ彼は呟いた。
帰巣本能を放棄した一族と呼ばれる蛇族はフリーダム故に迷子である。迷子になっても迷子とみとめないとかそういうことではなく、迷子になっても迷子でいいかと簡単に受け入れるその性質をもってして、彼等は「帰巣本能を」「放棄した」と称される所以がある。
「どうしよう」
このときの少年リアディは本気で焦っていた。
なにしろ、彼の家族はその方向音痴が約3名いるのである。エンは仕方ないとして、弟と妹が大問題。
幸い、弟のメイムはお兄ちゃん大好きっ子なので、多少の方向音

痴があっても近くに兄がいるかぎり日常生活に支障はきさない。（無口ながらもメイムは確実にブラコンである）

しかし、妹のマリアムは違う。

彼女はまだ幼いながらも見事な蛇族の典型をいっている。美味しいもの大好きでもある彼女はちょっとでも美味しそうな匂いを嗅ぎつけるとふらふらと寄っていっては迷子になる。

いつだったか、木の実を求めて枝の先にぶら下がり風に玩ばれていた姿はリアディの記憶に新しい。

【おにいちゃーん。これおいしいよー】

「マリアム――！！！！　無事か！」

まぐまぐと顔貌が変形するくらいの勢いで木の実をほおばった妹は、真っ青な顔で保護に走ったエンさまとリアディに笑顔で笑ったものだ。

エンさまの迷子性質とヨーコさんの食への執着心、ついでにいうなら本能への忠実さ。

そんなマリアムの将来をいまから本気でリアディは心配している。

大蛇一家のなか、帰巣本能を維持しているのは現状リアディとヨーコのみだ。

「――――無事かなあ、みんな」

置いてきた家族が心配な彼は、間違いない大蛇一家の長兄である。

頼みの綱はファンリーさまが派遣してくださった従者の方々だけだ。ぶっちゃけ、本気で家族を頼みますと祈りあげてきたのは伊達ではないのだ。

迷子の現状を棚に上げたそんな彼に、別の方角からお声がかかった。

「迷子くん発見、で～す」

ぼくの勝ちですね、チェイサさま。

「ぬ。――――このワシが負けるとは」

なかなかやりますな。クロムさま。

「……どうも。こんばんは、です」

暗闇のなかでも見える竜族の視界のなかでは、美青年の赤毛の男と、その男に肩車されている竜族の長の息子がいたりした。

――――仲よろしいんですね、貴方がた。

「冒険。…しませんか？」

笑顔ですすめてくる相手の名を、クロム・バランというらしい。名前の【バラン】が示す通り、竜族の次期長らしい。

「ほほう、冒険。心躍りますなあ」

したり顔で頷いているのが竜族の老中の一人、チェイサさまとかいうらしい。

若い割には動きが爺くさいのは、元々の性格らしい。

「かえらせてください」

危険察知センサーがぴこぴこ動いてる気がするんです。

見えない危険を察知した少年リアディの反応はスル―する流れであったらしい。

――――理不尽だ。

【ひと・む―――楽しんで、】

「あははは。子供は冒険心を大事にしなくちゃいけませんよ、リアディくん」
「ははははは。大人はどーんとそれを見守るもんだぞ、リー坊くん」

理不尽な竜族凸凹コンビは真夜中にそう言った。
チェイサさま、リー坊呼ぶのはヨーコさんとファンリーさんとエンさまと、ガラ・オンさまだけの特権なんで止めてください。（いやその前になぜその呼び名を知ってるんですか）
さりげに逃走ルートを潰されてしまったことに早々に気付いた彼は、無言で一歩後ろを歩いた。
クロムさまが持っている灯火で映し出される二人の影をたまに踏みしめていることに少し歪んだ満足感を覚えているのは内緒である。

「…なんで、そんなに楽しそうなんです？」

疑問符を直接きけるのは子供の特権である。
まだまだ幼い域に片足を遺しているリアディは素直に聞いてみた。

「そうですね、きっと嬉しいからですよ、リアディくん」
「そうさな、楽しいのさ、リ―坊くん」
灯火に移る二人の顔はじつに怪しく楽しそうであった。
…ただの酔っ払いかと思ったリアディに罪はない。
「君にはわからないでしょうが。僕らは嬉しいんです。――― 彼女の存在を感じて」
「ふむ。 ワシには残念ながらそのようなことは思えぬが」
しかし、稀なことは面白い。
微笑んで語ったクロムさまの言葉に否を唱えたチェイサさまは、それに一言付け足した。
「面白いことは楽しむのが宜しかろ」
快楽主義者という言葉をリアディが学ぶのは、残念ながらこの数年後であった。

夜闇のなか、黒雲が月を隠したその隙に消えたのは竜族の凸凹コンビ。
好きなだけ城のなかを無暗に連れまわされていた少年にどうしろ

というのか。
困ったまま立ちつくしていた彼は、もう一度その感覚を覚えた。
「誰か、呼んでいるのか？」

白い壁の地下の部屋。
少年は知らずに、禁域へ足を入れる。

白はその部屋の色だった。
どこか寒々しい感のある部屋は、ただ静かにそこにあった。
「――誰か、いるのか？」
問うた少年の声は。
「おや。夜ふかしは成長期によくないぞ、少年」
一人の男の声に応えられた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0286v/

竜の世界にとりっぷ！９

2011年10月10日14時11分発行